



四万十町
町内「ぶんり」散策

若井



国 道381号から若井大橋を渡る時、そこが若井地区である。若井大橋のすぐ西に補修が終わった若井沈下橋も見える。四万十川と集落の間を、まるで集落を守るように予土線・土佐くろしお鉄道の線路が走る。広々とした空間にポツンとある若井駅がかわいらしい。ここ若井には現在、44世帯、92人が暮らしている。

灌漑の技術が現在のように発達するまでは、農業用水の確保に苦労した地区である。昔から、ため池を作ったり、小谷のわずかな谷水などを利用しながら田畑をなんとか耕作してきた。近代になって、若井川を高野との境でせき止め、そこから各圃場へ水路をめぐらす工事ができたことによって飛躍的に改善したという。

戦国期の記録からすると、若井村と隣の高野村とはそれぞれ独立した村であったとみえるが、江戸時代・元禄期の記録では、若井村の中に高野が組み込まれている。しかし、幕末期に再び若井村から高野村が独立したようである。

若井の産土神は春日神社である。春日神社には「春日神社奉納花取太刀踊」が伝わっている。昭和30年代にはすでに、地区住民たちによって保存会が立ち上げられ、今日まで大切に伝承されてきた。終戦後しばらくは刀の使用ができなかったため、太刀踊りの伝承には苦労したという。その春日神社にまつわる逸話がある。

時代はわからないが、昔々、かなり昔現在の場所ではなく、もつと川に近い場所に神社があった。ある時、四万十川が氾濫する大水害に見舞われたという。社そのものが流されたため、保管されていた神輿や太鼓なども、全て大水に流されてしまった。大水が収まってから数日経ったある日のこと、ここからずいぶん下流の集落に住むという人が、太鼓をたたきながらやってきた。その人が若井村の人々に尋ねた。「私は、うちの集落に流れ着いたこの太鼓をたたきながら、川を上って来ました。どの集落でもこの太鼓はろくに音が出ませんでしたが、この村に入った途端に素晴らしい音が出ました。もしかしたら、この太鼓はこの村にあったものではありませんか？」村人が驚いてその太鼓を見てみると、確かに村の神社にあった太鼓に間違いなかった。そして、流失してしまった太鼓は、晴れて春日神社に戻ってくることでできたのだという。

さて、若井には、十一面観音、弘法大師、不動明王などを祀る観音堂もあり、住民たちによって大切にされている。



昭和39年11月に作成された、若井花取踊保存会の資料

町のうごき				四万十川の 水質状況			
(1月31日)	人口	前月比		出生	死亡	転入	転出
男	8,131	-23	男	6	23	6	12
女	9,030	-19	女	0	17	8	10
計	17,161	-42	計	6	40	14	22
世帯数	8,506	-19	(1月中の届出)				
窪川地域	12,144人	大正地域	2,395人	十和地域	2,622人		
				適正值(mg/l)			
				2月1日			
				リン酸	≤ 1.0	測定範囲以下	
				硝酸	≤ 0.5	0.253	
				アンモニウム	≤ 5.0	測定範囲以下	
				アニオン活性剤	≤ 1.0	0.80	
				化学的酸素要求量	≤ 10.0	測定範囲以下	
調査：大正（吾川） 資料：四万十高校自然環境部							